愛媛大学教育学部紀要　教育科学　第46巻　第1号　19～24　1999

道徳性の発達に関する研究（1）
文章の違いによる大学生の道徳判断について

佐　藤　公　代
（教育心理学研究室）

（平成11年5月7日受理）

Study on the Moral Development

Kimiyo SATOU

問題と目的

「児童心理学の進歩」をひもといてみると，道徳性に関して，1962年に依田新，吉田章宏，1966年に大平勝馬，1969年に大西文行，1972年に加藤隆勝，1978年に無藤隆，1984年に二宮克美，1987年に内藤俊史，1996年に荒木紀幸，がまとめている。これらの文献によると，時代と共に，道徳性の心理学的研究も変わりつつある。道徳性の心理学的研究の歴史については，次回にまとめるとして，今回は，道徳性の発達について，主に3つの理論のまとめを列挙し，文章の違いによる大学生の道徳判断についてのデータを手がかりに，継続研究を行なう予定である。

道徳性の発達について，主に3つの理論が取り上げられている。

(1)　フロイトの精神・性的発達に関する精神分析理論：罪悪感に焦点を置いて説明し，文化的相対性は少ない。子どもはエディプス期に同一視を通して，一連の道徳的基準をパーソナリティに統合する。

(2)　行動主義理論による社会的学習理論：道徳的および非道徳的行動に焦点を置いて説明し，文化に相対的である。両親は子どもに報酬と罰を与えて，モデルになっている。

(3)　ピアジェの認知・発達的理論：道徳性についての判断に焦点を置いて説明し，基礎的な道徳的価値は，普遍的である。認知そのものとして，質的に違う6つの段階を，コールバークは提示している。両親は，子どもの役割の取り入れと規範に影響を及ぼしている。この6つの段階は，連続的に生起し，年齢と関連し，知能と社会的影響によって，進む速さは異なると，言われている。コールバークは，道徳的ジレンマの課題から，「文化を問わず子どもは同じ順序で段階を通過する。」と結論づけている。参考までに，6つの段階を列挙する。

第1段階（従順志向または報酬志向）：行為の結果は，人間的意義や価値とは無関係に是，非

の決定と関係している。

第2段階（手段交換的志向，または市場取引志向）：手段的に6つの欲求を充足させることから成り立っている。

第3段階（コンフォーシスト，役割同調主義者，または「よい子」志向）：よい行動とは，他の人の歓心をかうか，他の人を助けることである。

第4段階（法と秩序志向）：正しい行動は，義務の遂行，権威への尊敬，社会的秩序を維持する。

第5段階（社会的契約，法律的志向）：個人的価値の相違とコンセンサスに達するための手続きを強調する認識である。

第6段階（普遍的倫理原理志向）：善は正義の普遍的原理，相互性の原理，個人の尊厳に適合する良心として定義される。

6段階の詳細については，次回に述べるとする。今回の研究の目的は，読解や文章の違いからの比較研究なので，コールバークの6段階との関連では研究していないことを，おことわりしておく。

方　法

1）実験期間：1998年6月～7月

2）被験者：E大学1～4回生，294名（1群：64名，2群：85名，3群：82名，4群：63名）。

3）材料：ねつ造事件の新聞記事と窃盗事件の新聞記事。両方とも文体の違いや字数の違いよりも内容の違いの方に注目して比較する。

4）条件

1群：ねつ造事件の悪い印象を受ける記事を読む群

2群：ねつ造事件のそれほど悪くない印象を受ける記事を読む群

3群：窃盗事件の悪い印象を受ける記事を読む群

4群：窃盗事件のそれほど悪くない印象を受ける記事を読む群

5）手続き：無作為に4群に分ける。記事を読んでもらう。読み終えたら回収する。次に質問紙を配布し，各質問に答えてもらう。

6）結果の処理方法

①自由再生：3点…詳細に書かれたもの，2点…大体書かれたもの，1点…1行位で単純に書かれたもの。

②理解度：ねつ造事件に関しては，犯人の印象，心情について，各項目から選択する。窃盗事件に関しては，犯人の心情，事件後の予想，自分ならどうするかについて，各項目から選択する。

③犯人の印象：9つの形容詞を「5：よくあてはまる」－「1：まったくあてはまらない」の5件法で回答する。

仮説は次の通りである。

①「ねつ造事件」も「窃盗事件」も「悪い心象を受ける記事を読む群」の方が，「それほど悪くない印象を受ける記事を読む群」よりも自由再生量が多いだろう。

②「ねつ造事件」も「窃盗事件」も「悪い印象を受ける記事を読む群」の方が，「それほど悪

くない印象を受ける記事を読む群」よりも理解度において悪い結果を予測するだろう。
③「ねつ造事件」も「窃盗事件」も「悪い印象を受ける記事を読む群」の方が，「それほど悪くない印象を受ける記事を読む群」よりも犯人の印象は悪く，同情は少ないだろう。
④ねつ造よりも窃盗の犯人に対しての道徳判断は，厳しいだろう。

結果と考察

Table 1に各群における自由再生量の人数と％を示す。

Table 1　各群における自由再生量の人数（人）と％

自由再生量	1点		2点		3点	
	人数	％	人数	％	人数	％
1群	15	23.4	21	32.8	28	43.8
2群	5	5.9	39	45.9	41	48.2
3群	17	20.7	20	24.4	45	54.9
4群	10	15.9	29	46.0	24	38.1

Table 1から，1群と2群，3群と4群との比較において，有意差はみられないものの，高い点数をとった方は2群，3群の方である。よって，仮説①の「ねつ造事件」は支持されず，「窃盗事件」は支持される。これは，2群の記事が，新聞記事のようにかたい文章ではなく，コラムニストが書くような面白おかしく書いたものなので，被験者にとって印象に残りやすかったのであろう。

Table 2に各群における理解項目ごとの人数と％を示す。

Table 2(1)　各群における理解項目（理解1）ごとの人数（人）と％

理解1	1		2		3	
	人数	％	人数	％	人数	％
1群	24	37.5	40	62.5	−	−
2群	23	27.1	62	72.9	−	−
3群	46	56.1	31	37.8	5	6.1
4群	28	44.4	26	41.3	9	14.3

Table 2から，理解1「犯人は悪い人だと思うか」において，有意差はみられないものの，1群より2群の方が，1：思うよりも2：思わない，の方の回答が多い。理解2「犯人はなぜこんなことをしたか」において，1群より2群の方が，3：自己満足と4：好奇心，を選んだ人が非常に多く，正しいと思われる1：古生物学者への仕返し，2：ただのいたづら，を選んだ人は少ない。これは，記事の中の情報量の違いからであろう。理解3「犯人の心情」において，1群より2群の方が，1：だませてうれしい，の悪いイメージが多い。これは，2群は理解2において，1か2を選んだ人が多く，それに対応して，1を選んだと思われる。理解3で，1を選んだ26人は，理解1で1か2を選んでいた。これは情報量の違いから判断した結果であろう。

理解1「このあと，島根大学の学長は犯人にどのような対応をとったと思うか」に対し，3

Table 2(2)　各群における理解項目（理解２）ごとの人数（人）と%

理解２	1		2		3		4		5	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
1群	3	4.7	10	15.6	23	35.9	22	34.4	6	9.4
2群	27	31.8	25	29.4	30	35.3	2	2.4	1	1.2
3群	7	8.5	55	67.1	8	9.8	9	11.0	3	3.7
4群	7	11.1	42	66.7	5	7.9	9	14.3	−	−

Table 2(3)　各群における理解項目（理解３）ごとの人数（人）と%

理解３	1		2		3		4		5	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
1群	5	7.8	3	4.7	12	18.8	41	64.1	3	4.7
2群	26	30.6	4	4.7	7	8.2	44	51.8	4	4.7
3群	74	90.2	8	9.8	−	−	−	−	−	−
4群	59	93.7	4	6.3	−	−	−	−	−	−

群と４群とで有意差はみられなかったものの，３群は１：懲戒免職，４群は２：何ヶ月かの休職を選んだ割合が高い。これは４群の記事ではすでに解釈しているという結末があることから，３群の１よりも厳しくない対応が多く選ばれたのであろう。理解２「犯人の心情」に対し，３群と４群とで有意差はみられなかったものの，目立った割合の違いはない。４群は３群よりも反省の思いが強い１を選ぶだろうと予想したが，文章に関係なく窃盗（ATM にあったお金を取ってしまった）という罪（誘惑に負けてしまうという誰でも起こりうること）そのものへの犯人の気持ちを考えたのであろう。よって，仮説②の「ねつ造事件」は支持され，「窃盗事件」は１部支持される。理解３「あなたならどうするか」に対し，１：とどけるという人が，90%以上を占めている。２：とってしまうという人の理由は，金額によったり，誰も見ていなかったら，などがある。ほとんどの人は，頭では，してはいけないことの道徳判断はできているようである。

犯人の印象について因子分析をして，３因子を抽出した。第１因子は「悪さ」，第２因子は「同情的」，第３因子は「おもしろさ」である。各因子についての計数を求めたところ，第１因子.80，第２因子.56，第３因子.52であり，第１因子は信頼性がある。

Table 3 に犯人の印象について，１群，２群の因子別平均を示す。

Table 3　犯人の印象における１，２群の因子別平均

因子	1群		2群	
	M	SD	M	SD
悪さ	8.62	3.06	8.60	2.46
同情的	7.22	2.55	8.39	2.23
面白さ	9.88	1.82	10.99	1.83

Table 3 から，１群と２群において，両群とも，おもしろさの平均が高く，ついで，悪さ－同情的である。２群は１群よりも同情的の平均が高く，おもしろさの因子が非常に高い。こ

れは，1群の悪い印象を受ける文章は，そのまま犯人への同情を薄れさせ，2群では犯人への同情もある程度生まれ，新聞記事らしくない物語的な文章が，おもしろさの印象を与えている。

Table 4に犯人の印象について，3群，4群の因子別平均を示す。

Table 4　犯人の印象における3，4群の因子別平均

因　子	3　群		4　群	
	M	SD	M	SD
悪　さ	10.28	2.21	9.60	2.61
同 情 的	9.63	2.51	10.22	2.25
面 白 さ	6.84	2.40	7.33	2.50

Table 4から，3群では悪さの平均が高く，次いで同情的－おもしろさ，4群では，同情的－悪さ－おもしろさ，の順である。これは，被験者に，身近に起こりうる事件として受けとめられ，3群，4群とも，文章も，悪さの印象が高くなったのであろう。そして，3群では，犯人への処置がどうなるかなとも気になるような記事の終わり方をしているので，おもしろさは低い。しかし，その反動で同情も集めた結果となったのであろう。4群では，解決した事件となっているから，犯人をこれ以上責めなくても良いという同情が高くなったのであろう。よって，仮説③は「ねつ造事件」では一部支持され，「窃盗事件」では支持される。

Table 5に「ねつ造1，2群」と「窃盗3，4群」の因子別平均を示す。

Table 5「ねつ造（1，2群)」と「窃盗（3，4群)」の因子別平均

因　子	「ねつ造」		「窃盗」	
	M	SD	M	SD
悪　さ	8.61	2.72	9.99	2.41
同 情 的	7.89	2.43	9.89	2.41
面 白 さ	10.51	1.90	7.06	2.45

Table 5から，「ねつ造」では，犯人の印象は，おもしろさ－悪さ－同情的の順である。なかでも，おもしろさは他の因子とかなりの差がある。これは，被験者にとっては身近に起こりやすい事件ではないし，興味がある分野でもなく，犯人の大胆ないたずらに逆におもしろさを感じ，世界をだますことができたという妙な関心をもったからであろう。「窃盗」では，悪さ－同情的－おもしろさの順である。窃盗に関しては，被験者にとって，身近に起こりうる事件なので，自分を被験者にも加害者にも置き換えて考えることができ，悪いことであると判断しやすかったのであろう。よって，仮説④は支持される。

結　　論

同じ事件でも，文章の違いによって印象は変わり，その本人に対する道徳判断も多少なりとも違ってくる。明らかに罪であることに対しても，「自分の興味」や，「自分にどれだけおきかえることができるか」，「自分に利害があるか」などを判断の手段にして，すなわち，価値観の違いによって，道徳判断はなされていくのだろう。

今後の課題

今後は，(1)コールバークの発達段階と文章の違いによる大学生の道徳判断との関連，(2)文化の違いにおけるコールバークの発達段階，を明らかにする。

参考文献

荒木紀幸　1996　道徳教育　児童心理学の進歩　129－156
岩佐信道　1990　道徳判断の日米比較　教心32回総会　64
南　博監訳　1983　図説現代の心理学　講談社
大西文行（編）1991新・児童心理学講座６巻　道徳性と規範意識の発達　金子書房
ピアジェ著・大伴茂訳　1957　児童道徳判断の発達　同文書院
山岸明子　1995　道徳性の発達に関する実証的・理論的研究　風間書房

（注）

データ整理や問題作成にかかわりました横田朱美氏と被験者の皆様には，大変お世話になりまして，深く感謝致します。